

約13万1000年前(更新世末期<アレレード期>)に中東の砂漠などに生息していた亜種リビアヤマネコであることが判明した^[3]。


愛玩用家畜として同じく一般的なイヌ *Canis lupus familiaris*に比して、ネコは飼育開始の時期が遅いが、これは家畜化の経緯の相違による。イヌは狩猟採集民に猟犬や番犬として必要とされ、早くから人の社会に組み込まれたが、ネコは、農耕の開始に伴い鼠害(ネズミの害)が深刻にならない限り有用性がなく、むしろ狩猟者としては競合相手ですらあった。その競合的捕食動物が人のパートナーとなり得たのは、穀物という「一定期間の保管を要する食害を受けやすい財産」を人類が保有するようになり、財産の番人としてのネコの役割が登場したことによる。また、伝染病を媒介する鼠を駆除することは、結果的に疫病の予防にもなった。さらに、記録媒体として紙など食害されやすい材料が現れると、これを守ることも期待された。日本には平安時代に倉庫の穀物や経典類の番人として輸入されたことにより渡来してきたものと考えられてきた^{[4][5]}が、近年の研究では移入期が紀元前2世紀の弥生時代までさかのぼる可能性が出てきた^[6]。

農耕が開始され集落が出現した時期の中東周辺で、山野でネズミやノウサギを追っていたネコがネズミが数多く集まる穀物の貯蔵場所に現れ、棲みついたのが始まりと考えられている(リビアヤマネコの生息地と農耕文化圏が重なった地域で、複数回起こっていたと考えられる)。穀物には手を出さず、それを食害する害獣、害虫のみを捕食することから、双方の利益が一致。穀物を守るネコは益獣として大切にされるようになり、やがて家畜化に繋がった。

初めて人に飼われたネコから現在のイエネコに直接血統が連続しているかは不明確。最古の飼育例は、キプロス島の約9,500年前の遺跡から見出される。また、今日のイエネコの直接的・系統的起源は明らかではないが、紀元前3000年ごろの古代エジプトで固定化されたものといわれている。

なお、さらに遡るとネコの祖先はミアキスという約6000万年前の中型肉食獣に遡る。ミアキスの特性に近いままプロアイルルスを経て進化した種がネコであり、平原に出て集団狩猟を行う種を経て現在の姿に進化した種がイヌである。

身体的特徴

 この節は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。(2009年11月)

概要

体の大きさは現生するネコ科の他のほとんどの動物に比べて小さく、体重は2.5 - 7.5kgの範囲に収まるものが多いものの、大型のものでは、体長(頭胴長)75cm(比較資料:「長さの比較」)、尾長40cm、肩高35cmに達する。

樹上生の傾向が強く、また、待ち伏せ型捕食者の典型であるネコの特性は、様々な身体的特徴として見るができる。非常に優れた平衡感覚に、柔軟性と瞬発力のきわめて高い体の構造、武器である鋭い鉤爪(かぎづめ)や牙を持ち、足音が非常に小さく、体臭が少ないことも挙げられる。また、爪を自由に出し入れできることはその鋭さを常に保持できることを意味し、ほとんどのネコ科動物に共通する特徴である。爪は何時も研いで鋭くする。長く追うことで疲弊させる、あるいは、組織的な罠によって追い詰める追跡型捕食者であるイヌ科動物とは対照的である。

吻部(眼窩下部から口先もしくは鼻先までの部位)が突出していない丸い頭部を持ち、正対視するのに有利な前面に眼窩(がんか)が開いている。このことはネコとヒトに共通の身体的特徴で、眼による感情表現が豊かであることも意味し、これがヒトがネコに対して抱く親近感の理由ではないかとも考えられている。

他のネコ科動物にも見られる「ゴロゴロ(purr)」と喉(のど)を振動させる音のメカニズムには複数の説があり、はっきりとしていない。この音は、親子間のコミュニケーションにも用いられる(後述「#喉鳴らし」)。

年齢と寿命

ネコは1歳くらいになると生殖可能年齢を迎え、5歳くらいで落ち着いた雰囲気を醸し出し、7歳あたりから高齢期に差し掛かり、20歳超えはかなりの長寿とされる^[注釈 1]。

屋外で暮らさなければならない野良ネコと人間に室内で飼われているネコの寿命には、歴然とした差がある。多くの天敵や事故・怪我・病気やそれに伴うストレスに晒されており、大学機関や自治体関連部門によれば野良ネコの寿命は3年から5年といわれており^{[9][10][11][12][13]}、その大半が子ネコの内に死亡する。^[14]ネコの年齢をヒトに換算すると、室内ネコの場合は例として1歳で人間でいう17 - 20歳、2歳で23 - 25歳、以降は1年ごとに4、5歳ずつ比例していく計算となるが、成熟期が短く中年期が長いため単純な比較はできない^[15]。

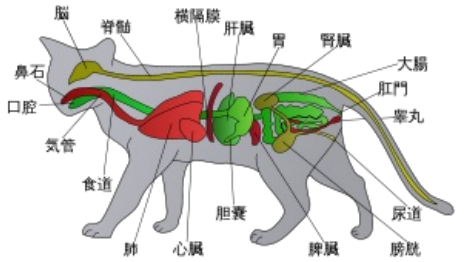
ネコの年齢									
6ヶ月	1歳	3歳	6歳	8歳	9歳	10歳	13歳	16歳	20歳



イエネコの原種とされるリビアヤマネコ家畜化以前の特徴を維持している。南アフリカ共和国ハウテン州、ヨハネスブルグ動物園。



ネコは農耕の開始に伴い人に飼われるようになった。



ネコ(オス)の体の構造
■赤=主に呼吸器系 ■緑=主に消化器系 ■金色=神経系とその他

14歳	16歳	20歳	30歳	40歳	50歳	60歳	70歳	80歳	90歳
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

体格

ネコは骨格や筋肉の付きかた、脚の長さなどによっていくつかの種類に分類することができる。コビーと呼ばれる種類は短い胴にがっしりとした肩や腰、やや短めの尾を持ち、この代表とされるのがベルシャである。一方、逆三角形の顔に長い四肢、鞭のような尾をもつオリエンタルというタイプを代表する種はシャムである。この二種の間を分割し、セミコビー、セミフォーリン、フォーリン、そしてそれらの種類とまた違うロング&サブスタンスナル(長く、がっしりとした、という意味)という種類を加えた6種がネコの体格に関する基本的区分である^[16]。



コビーを代表するベルシャ。丸みを帯びたシルエットはぬいぐるみのようである。

体の柔軟性

ネコの体は非常に柔軟性が高い。関節が緩やかで、筋肉や靱帯も柔らかいため、頭の周り以外は体のほぼ全ての場所を自分で舐めることができる。特に肩の関節は可動性が高く、鎖骨は退化しているが、小さいながらも存在しており(犬や馬など鎖骨がない動物は前腕を内側に曲げ抱きつく所作がとれず木登りができない)、筋肉でつながっている。これらは高い所から着地した場合の衝撃を吸収することに役立っている。また、内臓を前後に移動させることができ、これを利用する形で狭い場所を通れるよう身体の幅を自在に調節することが可能となっている。

運動能力

待ち伏せ型の肉食獣であるネコは俊敏な運動能力をもっている。瞬発力が高く、跳躍力にも長けている。跳躍力は、およそ体高の5倍程度(約1.5m程度)の所に飛び上がることができる。走るスピードは最高でおおよそ時速48kmといわれ、瞬間的に最高速に達する代わりに長くは続かない^[17]。その運動能力にもかかわらず、ネコが自動車に轢かれることは多いが、それは運動能力の問題ではなく、想像を超える大きさの物体(自動車)に突然遭遇してしまったとき、判断力を失ってその場で体の動きを止めてしまうからであるとされるが異説もある(「#眼・視覚」を参照)。平衡感覚を司る三半規管の能力とは別に、ネコには小脳の視覚による優れた水平線検出能力が備わっており、これによって、三半規管が失調した状態でも、正向反射として空中で正しく上下を判断した上で四本の足を使い着地を行う^[17]。



オリエンタルを代表するシャム。四肢は長く、肩幅は狭い。

被毛

被毛は品種により、さまざまな毛色や毛質のパターンを持つ。同品種でも多様な色彩や模様を持つ珍しい動物である。毛色や毛質の決定には遺伝子の働きによるところが大きいことが分かっているが、遺伝子がどのように活性化、不活性化するかなど、不明な点も多い。毛色は子宮内の状態にも影響を受けるともいわれる。例えば、世界初のクローンネコ「CC」の毛色は、遺伝子が全く同じにもかかわらず、クローン親のものとは異なっていることが知られている。

毛色を司る遺伝子は、すでにいくつか解明されており、色を薄めるダイリュート遺伝子や、被毛に縞模様を描くタビー遺伝子などの存在が知られている。品種によっては、突然変異体の遺伝子や、伴性遺伝子の存在もあることから、生まれてくる仔猫の毛色・毛質等をおおよそ判定することは可能であるが、不明な部分も多い。

以下に、現在解明されている主要な遺伝子を例示する。

優性遺伝子	役割	対立(劣性)遺伝子	役割
A	アグーティ(縞模様)	a	ノン・アグーティ(単色)
B	黒	b	茶色(チョコレート)
		b ^l	薄茶(シナモン)
C	単色(濃淡なし)	c ^b	セピア(バーミーズ)
		c ^s	ポインテッド(シャム模様)
D	濃暗色	d	淡明色(ダイリュート)
I	抑圧(銀化)	i	基底に及ぶ色素沈着
L	短毛	l	長毛
O	オレンジ(または伴性遺伝の赤)	o	黒味を帯びた非赤色
S	白の斑	s	ソリッドカラー(体全体)
T	縞(マッカレルタビー)	t ^a	アビシニアン(ティックドタビー)
		t ^b	ブロットド(クラシック)タビー
W	体全体が白	w	白以外



シルバー・ブロットド(クラシック)タビーのアメリカン・ショートヘア。ブロットドタビーはアメリカン・ショートヘアの要件ではないが、日本でアメリカン・ショートヘアというときまずシルバー・ブロットドタビーの個体がイメージされる。

これらの遺伝子の組み合わせによって、複雑な模様を形作る。これら以外にも毛色を決定する遺伝子もあり、解明されていない遺伝子も多数存在する。

O遺伝子および対立遺伝子o遺伝子はX染色体上にあることが分かっており、このため両方の遺伝子を持つネコは通常メスであり、オスでは染色体異常(X染色体過剰、ヒトでいうクラインフェルター症候群相当)またはモザイク染色体のネコだけである。両方の遺伝子を持つネコはトーティシエル(いわゆる錆び猫<さびねこ>)あるいはトーティ・アンド・ホワイト(いわゆる三毛猫)と呼ばれるが、これらのネコにオスネコが珍しいのは、染色体異常のネコが非常に少ないためである。

ノン・アグーティ遺伝子はタビー遺伝子よりも上位であるため、ノン・アグーティを2つ(aa)持つネコ(黒猫など)には通常、縞模様は見られない。タビー遺伝子を持つネコには、仔猫のときなどにうっすらと縞模様が現れることがあり、ゴースト・マーキングといわれる。

c^s遺伝子(サイアミーズ)は独特の遺伝子で、本来は色素の出現を抑える役割を持つが、温度が低いとその働きが抑制される。そのため、これを持つネコは温度の低い体の末端部(鼻、耳、足先など)のみに色素が出現し、シャムネコのようなポイント模様が現れる。温度が低い環境でも色素が出現し、色が濃くなる。

白毛を発現させる遺伝子のうちの『白色遺伝子』は全ての色に対して優性であるため、これを持つネコは他の遺伝子にかかわらず、白猫になる^[19]。

- 黒猫 - 全身の毛が黒色の猫。
- 白猫 - 全身の毛が白色の猫。
- トラネコ(タビー) - トラのような縞模様がある猫。茶トラ猫、キジ猫、サバ猫など。
- 三毛猫 - 3色(一般的に白・茶色・黒)の猫。
- 錆び猫 - 黒と茶色の2色の猫。
- はちわれ - 顔面が鼻筋を境にした八の字形の2色になっている猫。

眼・視覚

顔の大きさの割に、かなり大きな眼を持っている。他の動物における幼獣の眼の大きさの比率に近く、これがネコを「可愛い」と思わせる一因にもなっている。

視覚については、特に対象の動きを捉えることを得意とする。8m位の距離ならば人間の顔を識別することが可能である^[20]。20m以内のものであれば、じっと見ることによって距離感をかなり正確に測ることができる。瞳孔は人間と異なり縦に細長くなっており、これは瞬時に瞳孔の大きさを変えることに有利という説や、野生状態で草むらのような縦長の視界で視覚を働かせるのに有利と考える説がある。瞳孔は調整の範囲が広く、明るい所では細長く、暗い所では目一杯開いて光の入る量を多くすることが可能なため、暗所での視力はよい。時計が一般的でなかった時代、猫の眼の瞳孔の広さは時間帯によって変わり、時間が真昼に近づけば近づくほど瞳孔の広さは狭くなり、逆に真夜中に近づくほど広くなることを利用して時間を知ることが行われていた。これとは別に、獲物などに狙いを定めてから飛びかかるまでの間も非常に大きく開く。



全身が白い白猫は通常において『白色遺伝子』の持ち主である^[18]。



ネコの眼。顔の大きさの割に大きい。



子猫の瞳。

他の多くの夜行性動物と同様、ネコの眼には輝板(タペタム)と呼ばれる層が網膜の下に備わっている。この層が光を反射するため、入射光と反射光の両方の光が網膜を通過することになり、わずかな光でも物を見ることができ。この反射光のため、暗所で観察者側から照明を当てたとき眼が光って見えることがある。この現象はシカなどの野生動物でも同様であり、ライトで照らして光って見えた眼の数で個体数を割り出す「ライトセンサス」にも利用されている。なお、「ネコの眼が光を増幅する原理は暗視鏡(ナイトビジョン)に活用されている」といわれることがあるが、実際の暗視装置ではマイクロチャンネルプレートで電氣的に増幅しているものであるため、全くの出鱈目である。夜でもよく見えるネコの眼は非常に敏感で、フラッシュ撮影をしたりすると嫌がったりストレスを与えることとなり、目を痛めてしまう可能性もあることが指摘されており、プロカメラマンは猫の撮影の際にはフラッシュを控えるか、外付フラッシュで猫ではなく天井に向けて光らせる等の方法を薦めている^{[21][22][23][24][25][26]}。

色覚については、光の三原色のうち青と緑と赤の全てを一応は認識できるが、赤の場合薄いピンクにしか認識できない。基本的にはモトローソンの視界である^[19]。

瞬膜が、わりと大きく、体調の悪い時等に眼球の前に出てくる事がある(チェリーアイ)。

目が開いてから授乳期後半頃までの幼猫は、やや外斜視である。

眼の色

虹彩が大きな割合を占めており、人間でいう「白目」(球結膜)は通常見られない。ネコの眼の色、といった場合、虹彩の色を指す。眼の色は、色の濃淡などの違いがあるものの、おおむね以下の4種類に分けられる。

- カッパー(銅) - cf. 色名としては、en:Copper (color)
- ヘーゼル(薄茶) - cf. 色としては、榛色に近い。
- 緑
- 青

青い眼は白猫とシャム系のネコ(ポイントのあるネコ)に多く、白猫の場合は高い割合で聴覚障害を持っている。白猫の場合はオッドアイと言われる、左右の眼の色が違う場合も多い。この場合、青い眼の側の耳に聴覚障害を抱えることがある。一方が黄色で、もう一方が黄味のない淡銀灰色/あるいは淡青色というオッドアイは、日本では『金目銀目(きんめぎんめ)』と呼ばれ、縁起が良いものとして珍重されてきた^[27]。シャム系のネコの場合、立体視力に問題がある場合があるが、品種改良の結果、このようなネコは多くない。



オッドアイ。この個体では、左眼が暗色、右眼が青になっている。

これらの眼の色の違いは、虹彩におけるメラニン色素の量で決まり、色素が多い順にカッパー、ヘーゼル、緑、青となる。人間など他の哺乳類の眼でも同様である。色素の量の違いは、元々生息していた地域の日光量の違いに由来するといわれる(日光量が多い地域では色素が多くなる)が、交雑の結果、現在では地域による違いはほとんどなくなっている。シャムネコの青い眼は北アジア由来といわれ、熱帯のタイ原産のシャムネコであるが、先祖の眼の色に由来するという。

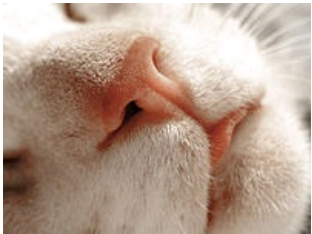
生まれて間もない仔猫の場合、品種に関わらず、虹彩に色素が沈着していない場合が多く、青目に見えることが多い^[28]。これを「キトゥン・ブルー」(Kitten Blue、「仔猫の青」の意)という。生後7週間くらいから虹彩に色素がつき始め、徐々に本来の眼の色になっていく。

耳・聴覚

ネコの五感で最も優れているのは聴覚である。可聴周波数は60Hz - 65kHzとされ^[29]、イヌの40Hz - 47kHz、ヒトの20Hz - 20kHz に比べて高音域に強い。これはネズミなどが発する高音に反応するよう適応したためといわれている。耳は片方ずつ別々に動かすことができ、異なる方向の音を聞き分けることができる。そのため、指向性が強く、音源の場所をかなり正確に特定することができる。音の聞き分けの能力も高く、例えば飼い主が帰ってきた足音を判別することは簡単にできる。これらの能力は、夜間に待ち伏せ型の狩りをするのに適応し発達したものと考えられている。耳の動きは感情にも左右され、特にネコがおびえているときは耳はうしろ向きに伏せられる。

鼻・嗅覚

鼻は、他の動物に比べてそれほど優れているわけでもないが、それでもヒトと比べれば数万から数十万倍と言われる嗅覚を持つ。体のバランスに比べて小さくできているが、鼻腔内部は凹凸に富み、大きな表面積を生み出しているため、小さな鼻の外観だけでは予想できない優れた嗅覚がある。



ネコの鼻

また、ネコの鼻は個体によって異なる紋様を持っており、これは「鼻紋」と呼ばれ、人でいうところの指紋と同じものであり、個体の識別に用いることが可能である。

嗅覚の優れた動物の代表であるイヌとは狩りの仕方が異なり、嗅覚を狩りに利用することはほとんどなく、ネコの嗅覚は食物の峻別や縄張りの確認に主に使うと考えられている。ネコは頬腺などから出る分泌物や尿などによって自分の臭いを付け、縄張り、あるいは仲間同士のコミュニケーションのために臭い付けをする行動を、飼い主やほかのネコに対して行う場合がある。例えば、ネコが飼い主の足に顔をすり寄せるのは、頬腺などから出る分泌物を付け、「自分の物」というマーキングをしているわけである。



ネコの鼻紋

フレーメン反応

フェロモンを感じる器官が口内の上顎にあり、ヤコブソン器官(鋤鼻くじょび)器官という。

フェロモンを感じると口を半開きにし、目を半分閉じて笑っているような表情を示す場合があり、これをフレーメン反応といい、フェロモンを分析している行動である。これにより、主に相手のネコがどういう状態にあるかを分析する。また毛づくろいで自分の肛門の周囲をなめたときにもこの反応を示すことがある。マタタビの果実やイヌハッカの匂いを嗅ぐと、ネコは恍惚として身悶えるような反応を示す。これは匂いに含まれるマタタビラクトンやネペタラクトンなどの物質にヤコブソン器官が反応し、ネコに陶醉感をもたらすためといわれており、これはネコ科全般の動物に起こる反応である。



自分のおいでフレーメン反応を示すネコ

舌・味覚

舌は薄く締まっており、表の面には多数の鉤状突起があってザラザラしているが、これは骨に付いた肉をしゃぶりどるのに適応したものである。この突起は毛づくろいや水を飲む際にも役立つ。この特質と形状を模してパソコンのポインティング・スティックには猫の舌状のものが製品化されている^[30]。また、掃除機のゴミ圧縮ブレードにも応用されている^[31]。この糸状乳頭と呼ばれる突起の形状は管を半分に割ったような形をしており、そこに唾液などを含むことができることが解明された^{[32][33]}。

熱い食べ物が苦手な人を「猫舌」と俗称するが、ネコのみが特に熱いものを嫌うというわけではない。野生動物は山火事などの後に屍肉を漁るくらいしか熱を持った食物を口にする機会がなく、全般的に熱いものに慣れていないためである。

ネコ科の動物に共通する特徴であるが、味蕾が他の哺乳類とは異なっており、甘味を認識することができない。アメリカのMonell Chemical Senses CenterとイギリスのWaltham Centre for Pet Nutritionの両所の科学者達が行った研究において、砂糖を含んだ水と普通の水を数十匹のネコに与えたところ、どちらの水も同程度飲んだことが確認された。それ以前の研究で、ネコが砂糖に関心を持たないことは示されていた。彼らはネコのDNAを調べ、甘味を受容する器官を構成する二つのたんぱく質の内の一つであるT1R2に対応する遺伝子の欠陥により、その器官をもはや作ることができないことを見いだした。一匹のライオンと一匹のチーターのDNAでも同じ結果を確認した。また極端な肉食性が砂糖に対する味覚を無関係のものとし、甘味を受容器官に変異を生じさせることを許したということを提唱している^[34]。猫のような肉食動物は、糖新生の酵素活性が高く、タンパク質から分解されて得られた糖原性アミノ酸から糖新生を行って体内で必要な糖分を生成している^[35]。

アミノ酸に対する反応が強く、特に苦味を認識する味蕾は多くある。これはアミノ酸が腐敗したときの苦味を強く感じることによって、腐肉を食べることを避ける役割を担っていると考えられている。ネコの食物に対する嗜好は、これらの味蕾の構成の違いが要因の一つと考えられている。

牙

猫の牙は生後2ヶ月 - 8ヶ月で乳歯の脇から永久歯が生え始め、やがて乳歯が抜け落ちる。

ひげ

ネコのひげ(洞毛)は感覚器として重要な役割を果たしており、ネコを象徴する特徴の一つとしてその印象を大きく左右する。品種や個体によつてその数は異なり、少ないもので6-8対、多いもので27対程度と幅広い^[37]。スフィンクスのように口ひげがほとんどあるいはまったくない個体がいる品種もある。ネコのひげは毛根部分に感覚神経や血管が密に分布しており、非常に鋭敏で、先端に何かが少し触れても感じ取れる^[38]。ひげの状態はネコの感情によつて変化する。たとえば目の前にあるものに好奇心を持つとひげは前に向き、おびえているときはびったり頬にくっつくことが多い。口の周りだけでなく、眼の上、顔の横にもあり、それらの先端を結ぶと顔を一周する大きな円になり、これで狭い通路を通り抜けられるかどうかを判断できるので、獲物の追跡、敵からの逃走に重要な役割を果たす(ただし、一部に否定説あり)。顔以外では、前肢の関節付近の裏側にも生えている。長さは若いほど長く、歳をとったものほど短い。ひげは生え変わるが、無理に抜くとひどい場合はストレスで死んでしまうこともある。

尾

尾はおおむねその胴体ほどの長さであるが、ジャパニーズボブテイルやクリルアイランドボブテイルのように極端に短いものや、マンクスのように尾がない個体もある。尾の役割は、感情を表すほか、走行時や跳躍・着地の際に体のバランスを取る役割がある。イエネコについては尾がなくても行動にほとんど支障はないと考えられている。

従来の日本産のネコは、世界に現存するほとんどのネコに比べ、ジャパニーズボブテイルのように尾は半分以下もないことが普通であったが、戦後(太平洋戦争終了後)以来日本在来のネコに海外のネコの血統が混入し続けた結果、一部地域を除くほとんどの場所で尾の長い個体が大半を占めるようになっている。

長崎県を中心とした九州地方全域において、尾が極端に曲がった個体の存在が報告されている^[39]。尾骨が極端に湾曲した個体は東南アジアの個体に顕著に見られる特徴であり、長崎県を中心とした尾曲がりネコは明治以前の出島交易時に東南アジアの個体が長崎に持ち込まれ混血した結果であると見られている^[39]。

尾は脊髄と直結しているため、非常に痛覚が強い。よつて、尾を持って引っ張ったりすると大人しい個体でも抵抗する。また猫の尻尾を強く引っばると内臓に障害を起こしたり脊髄に損傷を起こし下肢(後ろ足)などに障害が発生することもある。

襟首

襟首(えりくび)と呼ばれる頸(首)の後ろの皮膜は痛点が鈍化しており、親猫が仔猫を運ぶときここをくわえる。この特徴は成猫になつても残るため、成猫でもヒトがここをつかんで持ち上げることができる。持ち上げなくとも襟頸を掴むだけで大人しくなる傾向があるため、気性の荒い猫や野良猫を扱う際に有効である。これは、母猫が危険を感じた時にしか使われない方法のため、猫は緊張して動きを止めていると考えられている。

母猫が仔猫の襟首をくわえて持ち運ぶことがあるが、これはくわえても仔猫に悪影響のない場所を母猫は本能的に知っているからできることであり、人間はその場所を知らないため、むやみに襟首を掴んで持ち上げると猫の頸を絞めてしまうことになりかねない。また、筋肉に悪い影響を与えるという説もあるので、襟首だけ掴んで成猫を持ち上げることは避けるほうがよい。

指

ネコの指の数は、通常前肢が5本、後肢が4本であるが、多指症という奇形が頻繁に見られ、ヘミングウェイの猫のように後肢に5本、あるいは前肢に6本というようなネコも少なくない。前肢、後肢に各7本、合計28本の指を持つネコが「世界一指の多いネコ」としてギネスブックに記載されている。

肛門囊

不意打ちを食らうと、肛門囊から臭いにおいを発することがある。

鳴き声

日本ではネコの鳴き声は「ニャー」、「ミャー」などの擬音語を用いるのが一般的。アメリカでは「meow」、イギリスでは「miaow」、ドイツでは「miau」、フランスでは「miaou」、中国では「miāo(、ˌwɪkt:ɛn:)」、イタリアでは「miao、 gnao(ニャオ)、 gnau(ニャウ)」と表す。

「ニャー」とは異なるものとしては、以下のようなものがある。

- 警戒・威嚇のうなり声・威嚇音。「フーツ」「ウー」「ハーツ」「カー」「シャーツ」など。



舌



永久歯への生え変わり



各部位のヒゲの名称^[36]



前肢のひげ(洞毛)



首の裏をくわえ仔猫を移動する親猫。



多指症により7本の指がある後肢

- えさを食べている時の威嚇。「ワウワウワウ」「マウマウマウ」「アオアオアオ」など。
- 発情期における、赤ちゃんのような独特の声。「オアーン」「オギヤー」「アーウ」「ナーオ」など。
- 後述のクラッキング(チャタリング)

カモメの鳴き声はしばしばネコのそれに喩えられ、英語では「mew」というネコの鳴き声を表す単語は「カモメ」という意味も持つ。日本語でもカモメの一種にウミネコ(海猫)と名付けられた鳥がいる。🐱 ネコの鳴き声

喉鳴らし

詳細は「喉鳴らし」を参照

ライオンやトラなども含むネコ科動物全般は喉をゴロゴロと鳴らすことで知られているが、これは声帯からではなく、胸腔の一部から発せられる音である^[40]。一般的には飼い主や懐いた人になでられるなどしてリラックスしている時にこの反応が見られるが、体調が悪い時や出産時(陣痛中)、死ぬ直前にも喉を鳴らすという。これらの行動の意味は未だにはっきり解明されていないが、普段から低周波の音を発生させることで骨格を丈夫にする、苦しいときに痛みを緩和し呼吸を楽にしている、などの説が存在する^[41]。

クラッキング(チャタリング)

ネコが「カカカ」のように歯を打ち鳴らしているような音を出す現象を**クラッキング**(英語圏などでは**チャタリング**(chattering))といい、ネコ科の動物でもネコだけが発するものである^[42]。


知能

知能は哺乳類の中でも高い部類に属し、人間とのコミュニケーションもかなりできることが、イヌと並ぶ愛玩動物の地位を獲得した要因となっている。根気よく繰り返して教えれば「ごはん」「おやつ」「遊ぶ?」のような簡単な言葉を聞き分け、意味を理解できるようになる個体も存在する。人間の簡単な言葉を真似する個体も存在する。俗に「ネコは頭が良い、イヌは賢い」とよくいわれるが、これは知能というよりも人間の都合からみた従順さである。またメインクーンなどに代表される、体長1m前後に達する大型種は、人間に従順で時にイヌのようにふるまう。これはネコと共通の祖先を持つイヌにも見られる傾向だが、大型種自体が少ないうえにイヌの種別間ほどははっきりした体格差はないことから、一般、特に日本では大型種の存在とその性格についての認知度が低い。

社会性

主従関係がはっきりした犬の従順さに比べ「猫は人になつかない」という印象も持たれるが、オレゴン州立大学の研究によれば、猫は自分を気にかけてかまってくれる人に懐き、無害ではあるが何も構わない人より、興味を持って接してくる人により多くの接触の時間を持ったという結果がある^[43]。また同様に犬ほど熱狂的な反応ではないが、猫は人のジェスチャーを理解し、自分の名前を聞き分けているという上智大学の研究結果がある^[44]。

繁殖

 この節は**検証可能な参考文献や出典**が全く示されていないか、不十分です。出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。(2009年11月)

種類および地域により差はあるが、だいたい春ならびに夏の初めに発情、交尾を行う。一部には発情期にあっても鳴き声をあげない、あるいは鳴いてもごくわずかである品種もあるが^[45]、よく知られているように、オスはその際、求愛行動として「さかり声」と呼ばれるけたたましい鳴き声を上げる。この習性は、その声を騒音と感じて迷惑に思う人間も多く、飼い主との間で問題に発展することもある。

発情

メスの発情

個体差もあるが、おおむね生後6か月から12か月で性的に成熟し、その後、定期的に発情する。発情の周期についてはいくつかの説がある。ネコは長日繁殖動物のため、暖かい時期と日照時間が14時間程度になる時期に発情がくる。日本では2月から4月と、6月から8月に相当する^[46]。人工灯も発情に影響するため、完全室内飼育の場合などは発情期間が長めになることもあり、季節に関わらず年に3回から4回ほどの発情がくることもある^[46]。発情期間は3 - 6日程度であるが、その間に交尾が行われない場合、10日ほどに延びることもある。発情すると、地面や柱、時には人間の膝等に体をこすり付けるなど行動に変化が現れ、ときには意地でも外に出ようと暴れることもある。



交尾中のネコ

オスの発情

メスよりやや2、3か月程度遅れて成熟するが、これも個体差が大きい。定期的な発情期はなく、メスの発情に誘発されて発情する。発情すると、スプレー(尿マーキング)と呼ばれる特徴的な行動を行うようになり、オス同士のけんかも多くなる。また、まれにメスでもスプレーをすることがある。

交尾

通常、交尾はオスがメスの背中に乗り、オスがメスの首筋を噛んでメスが逃げないようにして行う。ネコの交尾は相手が1匹に限定されるものではなく、機会があればオス・メス共に複数の異性で行う。そのため、同時に生まれた仔猫の父猫が別のネコであることはよくあることである。オスの陰茎には棘(とげ)状の突起が備わっており、この刺激によってメスの排卵を誘発するため、妊娠率は比較的高い。去勢したオスではこの突起が消滅する。



授乳中のネコ

北九州市立自然史・歴史博物館の学芸員、山根明弘によると30年以上調査が継続している相島の野良子猫のDNAを調べた結果、同じ集団で1番メスに近い所にいる強いオスよりも、他の集団から来たオスの子猫の方が多いことが分かった^[47]。

妊娠・出産

メスネコは、おおむね2 - 6匹程度の子を妊娠する。乳房は4対8個あるのが一般的(個体により6 - 12個と差がある)。妊娠期間は65日程度である^[48]。

出産は一般的に軽く、人や獣医師が手を貸す必要のないケースがほとんどである。仔猫は出産直後は羊水で濡れているが、母猫がなめて乾かし、数時間でふわっとした毛並みになる。母猫は出産当日は授乳に専念し、食事はあまり摂らないようである。代わりに後産で出た胎盤を栄養分として食べることが多い。

メスネコは年3 - 4回の出産が可能であり、年2回の出産は珍しくない。授乳期間中であっても交尾・妊娠する。

子猫の性別の見分け方

生後間もない子猫の性別の判断は非常に難しく、獣医であっても80%しか判別できないとされる。生後4週でほぼ確実に判断できるようになる。一般にオス・メスの区別は、肛門と尿の出口の距離によって判別する。オスは長く、メスは短い。また、オスの場合には将来陰嚢として大きくなる前の小さな膨らみがある。生後2か月にもなれば明らかに辜丸と判断できるほどになる。メスではこの部分が平坦になっている。オス・メス双方を比較すると分かりやすいが^[49]1匹だけの場合は判別が難しい^[49]。

子猫の排泄

生後間もない子猫は自ら排泄はできず、親ネコが排泄器を舐めることで刺激し、便や尿を排泄させ親ネコが食べている。このため親から離れた子ネコを人間が飼う場合には、排せつの補助をしなければならない。ぬるま湯を含んだガーゼで尻を刺激したり指で軽く叩くようにすると排泄を行う。または流し台などでぬるま湯を流しながら濡れた指でお尻を刺激するようにすると清潔に洗浄ができる。特に人工乳を与えている子ネコは排泄量が多いため、こまめに行う必要がある。生後1 - 1か月半でトイレでの排泄の練習を始める^[50]。



ネコの出産



出産直後のネコ。

食性

猫が他の動物を捕獲、捕食の様子



キツツキを捕らえる猫



前脚を使いネズミを食べる猫



ネズミをくわえる猫



ウサギを捕らえた猫

ネコの本来の食性は肉食性である。たんぱく質や脂質を必要とし、半野生的な生活を送っているネコは、生きた小獣(ネズミ、ウサギなど)・小鳥・小型爬虫類(ヘビ、トカゲなど)・小型両生類(カエルなど)・魚・小型節足動物(昆虫や蛛形類)といった小動物を捕食し、また飼育下に置かれているネコは与えられた獣肉・魚肉や、動物性の人工飼料(キャットフードなど)からそれらの栄養素を摂取する。

ネズミやスズメなどの獲物を捕まえた際、その場で食わずに安全な場所まで運んでから食べる習性がある。母猫の場合は仔猫に獲物を与えることで何が食べられるのかを教える。特に生きたまま与えることで狩りの訓練をさせるという側面がある。飼い猫や地域猫の場合も、よく懐いた人の元に獲物を持ち帰ったところを発見されることがある。

また、ネコはエンバクなど背の低い草を食べる習性があり、その理由は未だ明らかでないが、毛づくろいのときにどうしても吞み込んでしまつて蓄積した体毛を、草の繊維に引っかけて、まとめて排泄するためとする説や、植物性のビタミンや葉酸を草から直接摂取しているなどの説がある^[51]。どのネコにも共通しているのが、イネ科植物を好んで食べるということである。そのほかオリヅルランやテーブルヤシなどの単子葉植物の葉を食べることがある。ペットショップでは飼い猫用に「猫草」としてエンバクの芽ばえや種や栽培キツ下などが売られている。



猫草を食べる猫

与えればドッグフードも食べないことはないが、ネコにとっての必須栄養素であるタウリンはドッグフードにはあまり多く配合されていない。ネコはタウリンの生合成能力が極めて低いため、タウリンを摂取しないとタウリン欠乏をおこし、失明したり心筋症を発症することがある^[52]。タウリンの安定的摂取を望めない状況が続く場合には、獣医と相談し、タウリンを含有する猫用栄養補給剤を処方、猫に服用させる必要がある。他、ビール酵母サプリメントやノンアルコールビールが好物であり、おやつ代わりに与えている例も多い。当然、アルコールが入っている通常のビールを猫に与えるのは厳禁である。

乾燥した地域を進化上の故郷とすると思われるネコ科は元来、飲水量が少ない動物で、体内で水を有効に使うために尿の濃縮率が高く、濃い尿を出す。そのため、腎臓への負荷が高く、ネコの病気の7- 8割は腎臓の病気である。特に塩分の摂りすぎには注意が必要である。また、水は水道水が最も理想的(日本のほとんどの地域では、水道水はミネラル含有量が少ない軟水)である。一部ミネラルウォーターの硬水に含まれるマグネシウムは猫に対して高濃度に当たるため、腎臓などへの影響からも極力飲ませないようにするべきである。

一日に成猫が必要とする栄養素

あくまで必要なのはバランスであり、過剰給餌は健康を害する恐れがある^[53]。

蛋白質	脂肪	炭水化物	カルシウム	リン	ナトリウム	カリウム	マグネシウム	鉄	銅
餌の28%以上。仔猫の場合はその2倍。	9%以上	40%以下	1g	0.8g	0.2g	0.4g	0.05g	10mg	0.5mg
マンガン	亜鉛	ヨード	ビタミンA	ビタミンB ₁	ビタミンB ₂	ビタミンB ₆	<u>パントテン酸</u>	葉酸	ニコチン酸
1.0mg	4.0mg	0.1mg	550国際単位	0.5mg	0.5mg	0.4mg	1.0mg	0.1mg	4.5mg
ビタミンB ₁₂	コリン	タウリン	ビタミンC	ビタミンD	ビタミンE	ビタミンK	水分		
0.02mg	200mg	100mg	必要量無し	100国際単位	8.0mg	必要量無し	1kgあたり50-70ml		

一日の食餌必要量

妊娠した場合には5週頃から徐々に食餌の量を増やし、場合によっては専用の食餌を与える^[54]。

年齢・状態	餌の種類	カロリー	回数
3週	粉ミルク・缶詰・母乳		4-6回
4週	粉ミルク・缶詰・母乳		4-6回
5週	缶詰・母乳		4-5回
6-8週	おかゆ状にした上記の餌		3-4回
8週以上	離乳させる		3-4回
2-4ヶ月		250-425kcal	3-4回
4-5ヶ月		425-500kcal	3-4回
5-6ヶ月		500-600kcal	2-3回
6-12ヶ月		600-700kcal	1-2回
成猫		300-550kcal	1-2回 ドライフード・缶詰
妊娠後期		通常の3割増し	2-4回
哺乳期		通常の3倍	2-4回
老齢猫		吸収力の低下のため若干増やす	1-2回

ネコにとって危険な物質

人間が日常において嗜好・摂取する物の中で、ネコに対して有毒性を示す物品や物質や成分。基本的には市販の猫用缶詰などを与えるのが好ましい。

ネコに与えてはいけない食べ物

ユリ・タマネギ等のヒガンバナ科またはユリ科の植物

詳細は「タマネギ中毒」を参照

ネコやイヌにとってネギやタマネギ、ニンニク、ラッキョウなどといったヒガンバナ科の植物は極めて有毒とされている。ネギ類に含まれるアリルプロピルジスルフィドが、ネコやイヌの赤血球を破壊してしまい、貧血・食欲不振・呼吸困難・血尿・嘔吐を引き起こす。また、ユリ属の植物は特に有害であり、全ての部位に毒性があり、体毛に付着した花粉をなめただけで死亡した例やチューリップの生花を挿していた花瓶の水を摂取したことで重篤になったの安楽死といった事例も報告されており、アメリカの愛猫団体であるCFAは、これらの植物をネコに近づけないように勧告している。ヒヤシンスも同様に危険である。
また、ゆで汁やエキスなどでも有害でありハンバーグなどの練り製品、人間用のビーフジャーキー、すき焼き(の肉)、牛丼や茶碗蒸し、カップ麺などにも含まれることがあり、これらを口にすると中毒を起こすことがある^{[55][56][57]}。

アルカロイド類

アルカロイドを含む多くの植物は中毒の原因となる。また、種子類・球根は全て有害と考えられている。カフェインを含む、コーヒーや紅茶等も有害とされている^[55]。

イカ、タコ、エビ、カニ、貝等の一部の魚介類

イカなどに含まれる酵素であるチアミナーゼ（サイアミナーゼ）はビタミンB1を破壊するため、長期にわたって摂取した場合、背骨の変形を引き起こすなどし、寿命も短縮される。これが「イカを食べると腰を抜かす」といわれる所以である^{[55][56]}。チアミナーゼは、イカ・タコ・貝類といった軟体動物のほか、エビ・カニなど甲殻類やコイ・ワカサギなどの淡水魚にも含まれている。しかし、チアミナーゼは熱によって失活するため加熱すれば問題はなく、イカ・タコなどはネコにとっての必須栄養素であるタウリンを豊富に含むため、ネコには好まれ、イカ入りのキャットフードも存在する。ただし、イカ・タコなどは消化があまりよくないため、多量に摂取すると消化不良を起こす。また、乾物であるスルメなどは、多くの水分を奪う可能性があるが、パック包装などを施された湿り気のある商品はこれに当たらない^[注釈 2]。

なお、魚には基本的にビタミンB1が含まれていないため、肉を与えず魚だけで育てた場合も、寿命が短縮する。市販のキャットフードなどはビタミンB1を添加してあるため、魚が主原料であっても気にする必要はない。

アワビ、サザエ、ノリ

死亡する危険はないが、春先のアワビのツノワタ(内臓)を食べさせるとネコの耳が腐れ落ちると東北地方でいわれている。春先のアワビやサザエは餌としている海藻に含まれるクロロフィルをピロフェオホルパイド a という毒成分に変質させて、動物の体内に摂り込まれた状態で日光に当たると光過敏症を起こすことに基づいている。アワビなどは春先に「ピロフェオホルパイド a」という成分を内臓にためこんでいるので、これを食べると成分も体内に入る。ネコの体は被毛で覆われているため、たとえ日に当たっても光は皮膚までは届かず問題ない。しかし、耳だけは被毛が薄く、毛細血管にまで日光が届く。そのため、光過敏症で炎症を起こして激しいかゆみを生じる。ネコは耳を激しくかきむしり、取れるまでそれを続けてしまう。あるいは、毒成分によって耳の組織が壊死してしまい、取れてしまう^{[58][59]}。味付けされないノリは与えても構わないがミネラルが多いため量を制限（日量3g程度）する必要がある。過剰に摂取した場合尿路結石症などに罹る恐れがある。味付け海苔はナトリウム過剰摂取の可能性があるので与えない方が良い。

ブドウ、レーズン

アメリカの動物毒性コントロールセンターの調査・研究によると、原因物質は解明されていないが、ネコやイヌが摂取すると2-3時間後に嘔吐・下痢・食欲不振・腰痛が引き起こされ、3-5日後に腎不全の症状が発現し、最悪死に至るケースもあるとしている^[55]。

塩分・味の濃い食品

塩分は生体機能を維持するために必要であるが、ヒト向けに味付けされた食品の塩分量では一般に多すぎる。発汗に伴って多量の塩分を失うヒトに対し、ネコはほとんど汗をかかないことによる。塩分の摂り過ぎは腎臓に大きな負担をかけるので、塩辛い食品を安易に与えてはいけない^{[55][56]}。これはネコ以外にも当てはまり、ヒトの塩分に対する要求量/許容量が他の大半の陸生動物より高いことは認識しておく必要がある。

牛乳・乳製品

猫の乳に含まれる乳糖(ラクトース)の量は牛乳の半分程度といわれており、離乳前の子猫ではその牛乳の半分程度といわれる乳糖の量に対応するだけの消化酵素ラクターゼを持ち合わせているものの、離乳する2ヶ月齢頃以降になるとラクターゼは分泌されなくなる。そのため人間も飲用する牛乳は、含有する乳糖の量の多さから、下痢を引き起こす原因となる。加えて、牛乳と比べて猫の乳は脂肪とタンパク質を多く含んでおり、子猫のうちに母乳ではなく牛乳を与えていると、カロリー不足やタンパク質不足となって健全な成長を妨げかねない。このため、ミルクを与える場合には猫用（年齢により子猫用か成猫用の何れかを選択）のものを使用すべきである^{[60][61][62]}。

TBSテレビで2016年(平成28年)1月4日に放送された『ハッピーあにまる2016』内「激カワ&爆笑ネコ大集合」コーナーで、猫が牛舎内で搾乳中の牛から牛乳を直接一飲む場面が映し出され、視聴者から批判の声が上がっていた^[63]。

カカオ(チョコレート、ココア)

カカオに含まれるテオブロミンを代謝する能力がとても低いことから、大量に摂取した場合、下痢、嘔吐、興奮、けいれん、脈の乱れ、血尿などの中毒症状が現れ、最悪の場合、突然死することもある。

前出のTBSテレビ『ハッピーあにまる2016』内「激カワ&爆笑ネコ大集合」コーナーでロシアンブルーのオスがソフトクリームやチョコレートコーティングされたアイスを舐めるシーンが映し出され、視聴者から「死ぬぞ」等といった批判が殺到した^{[55][63][64]}。

カフェイン

コーヒー、紅茶、緑茶、栄養ドリンクなどに含まれるカフェインはテオブロミンと似たような中毒症状を起こす^[55]。

かつおぶし

かつおぶしにはリンやマグネシウムなどのミネラルが多く含まれており、摂取しすぎると慢性腎臓病や尿路結石を引き起こす原因となる^[65]。

青酸配糖体を含む食物

リンゴ、アンズ、モモ、プラム、スモモ、サクランボ、アーモンド等の枝、葉、種に含有される青酸配糖体が体内で青酸に変化し、呼吸困難、虚脱、痙攣、チック症状に陥り、最悪の場合は死に至る場合がある^[66]。

ソラニンを含む食物

ナス、トマト、ジャガイモ、ピーマン、ホオズキ等のナス科のほとんどの植物にネコに有毒なソラニンが含まれている。個体差があるが、ネコの場合は2-10mgが摂取量の上限であり、それを超えると過流涎、食欲不振、胃腸障害、下痢、中枢神経系の抑制、虚脱、散瞳、心拍数低下等に陥る場合がある。最悪の場合は、心筋梗塞を起こし死に至る^[66]。

アルコール

血液中に吸収されたアルコールが許容量を超えると、脳や体の細胞を破壊する。そのことから、嘔吐、下痢、神経症状、呼吸困難、ふるえ、昏睡状態に陥る場合がある。最悪の場合は死に至る。

食べ物以外の危険な生活物質

精油(エッセンシャルオイル)

アロマテラピーや芳香性の生活嗜好品に成分使用されている精油を吸引、皮膚・経口摂取すると、ネコの肝臓はその成分を解毒できず、重篤な後遺症が残ったり回復不能の致命的な事態に陥ることになる。ネコはフェノール類やモノテルペン類、ベンゼン環含有化合物に対する感受性が他の動物に比べ

て特異であるため、一般に出回っているほとんどの精油が有毒になる。一時期は抗ウイルス作用やノミ取り効果があるとされ、ペット用シャンプーなどにも含まれているティーツリーの希釈液への曝露による事故も報告されている^{[67][68][69][70]}。

家庭薬等

基本的に人が飲用・服用する経口薬をペットに与えるべきではなく、ネコの体を舐める習性により、頭髮や皮膚に塗布する外用薬にも注意が必要である。

鎮痛剤・解熱剤・感冒剤・サプリメント

グルクロン酸抱合能力が低いことなど、ヒトとネコの違いゆえに、鎮痛解熱剤として用いられるアセトアミノフェンは肝障害等を起こすためイヌやネコへの使用は厳禁であり、風邪薬に代表されるヒト用の家庭薬も同様である^[71]。

また、ダイエット目的のサプリメントとして用いられるα-リポ酸も、ネコにとっては肝機能障害を引き起こすなど身近な薬品での中毒事故が起こりうる^[72]。

養毛剤

壮年性脱毛に有効な外用薬ミノキシジルが付着した頭部をネコがなめるだけでも心機能に問題が起こり得るとされる^[73]。

湿布薬

非ステロイド性消炎鎮痛剤の一種で、筋肉痛や関節痛を和らげる効果の湿布や軟膏に含まれていることがある成分フルルビプロフェンをネコが摂取してしまうと、腸や腎臓に中毒症状が現れ、食欲不振、倦怠感、嘔吐、下血などを起こし、死亡に至るケースも複数件あったことに関しての報告と注意が、**2015年4月**にアメリカ食料医薬品局（**FDA**）から発表されている。摂取する経路は、薬剤を使用した飼い主の皮膚や、そこから薬剤が³付着した衣服・家具・ネコの身体からの経口であろうとみられている^{[74][75]}。

自然生態系への影響

現代においてほぼ世界中に存在するイエネコであるが、これは人為的に広まったのであり、それぞれの地域の生態系にとっては外来種であるイエネコは国際自然保護連合がリストアップした「世界の侵略的外来種ワースト100」にもランクインしており^{[76][77][78]}、人間に持ち込まれた猫によって地域の固有種を含む生態系に影響を及ぼしている事例がある。

日本での例としては、沖縄県に於いては野生化したイエネコが地域固有種のヤンバルクイナを捕食したり、鹿児島県の奄美大島に於いては同じく外来生物の mangroves によって一時は激減し、 mangroves への対策ののちに回復傾向にあったアマミノクロウサギが捕食されるケースが存在するほか^{[79][80]}、東京都の小笠原諸島では当該地域を繁殖地とするカツオドリや絶滅危惧種で当該地域にしか見られないアカガシラカラスバトなどを襲っていたが、捕獲し人に慣らしてからペットとして島外に譲渡するという対策を進め島内のネコの排除に成功しアカガシラカラスバトの生息数を回復させた。しかし一方で天敵のネコがいなくなったことで外来種のネズミが増え、固有種の植物が食害により数を減らしてしまうこととなった^{[81][82]}。ニュージーランドでも希少種の保護を目的としてネコのみを排除してしまったことで、同じく固有種に対する驚異として存在していた外来種ネズミの繁殖が拡大し、希少種の減少に歯止めがかからなかった事例などがあることから、対策に関しては個々の環境を精査に上、ネコだけでなく中位捕食種への対策も並行して行うなどの効果的なアプローチを選択する必要がある^[80]。沖縄県西表島ではイリオモテヤマネコへの猫エイズの感染などが、人の活動による交通事故や好適生息地の消失と改変とともに生息を脅かす要因として懸念されていたが^{[83][84]}、フネコを捕獲したのちに里親を探し譲渡するという活動に取り組み、全頭譲渡成功という成果を達成している^[80]。

ニュージーランドのステューブズ島における事例では、固有種であるスチーフンイワサザイの最後の1羽が、灯台守が飼育していた1匹のイエネコに捕食されたことにより絶滅した。ただし、元々スチーフンイワサザイは先史時代にはニュージーランド全域に生息していたが^{[85][86][87]}、マオリとともにニュージーランドに到達していたナンヨウネズミによる捕食により、19世紀の時点ではステューブズ島においてイエネコが駆逐した15羽しか確認されていない^[88]。

ネコによる捕食でアメリカでは毎年1億羽の小鳥が死亡しているという研究結果が出ている^[89]。

病気

ヒトおよびネコが罹患する病気を挙げる。詳細は各項に詳しい。

人獣共通感染症

人とネコで同じように感染する人畜共通感染症には代表的なものとして、狂犬病、トキソプラズマ症、パストレラ症、結核、細菌性の腸炎、皮膚病、および、バルトネラ菌の感染症である猫ひっかき病がある。しかし、生来清潔を好む性質ゆえに、ネコに関する限り伝染の危険性は低いといえる^[90]。

猫に特有の感染症

■ 猫免疫不全ウイルス感染症

猫免疫不全ウイルス (**FIV**) 感染を原因とする感染症。特別な治療法は無い。

猫後天性免疫不全症候群 (猫エイズ) は上記感染症の病態の一つ。

■ 猫白血病ウイルス感染症

猫白血病ウイルス (**FeLV**) を原因とする感染症。

■ 猫伝染性腹膜炎

猫伝染性腹膜炎ウイルス (**FIPV**) を原因とする感染症。


■ 歯周病

3歳になるまでに、約80%の猫が歯周病を抱えており、内臓疾患を起こす原因にもなりうる。

■ ネックリージョン（被歯細胞性吸収病巣、歯頸部吸収病巣）

4歳になるまでに、約60%の猫に起こるといわれ、原因は不明。

習性



この節の加筆 (<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%8D%E3%82%B3&action=edit>)が望まれています。

睡眠

ネコの語源が「寝子」であるという説もあるほどにイエネコの睡眠時間は人間に比べて長い。一般的に、ネコは一日の大半を寝て過ごすといわれている。ネコの飼い方の本（獣医師による解説）などでは、一般に「14時間程度」とか「16時間程度」と解説されていることが多い。また「長いネコでは20時間程度眠る」といった解説も多い^[91]。なお、睡眠時間が長い傾向にあるのは、ネコ科の動物、肉食動物に共通して見られる傾向である。草食動物に比べて食物を得る機会に乏しい反面、その食物は草食動物の場合と比べて高カロリーであり、一度食物を得るとしばらくは食べる必要が無いため、何もしない時間帯は寝ることでカロリーの消費を抑えていると考えられる。

外からの訪問者が少ない住宅で、家族や近隣に可愛いがられ、餌が十分に与えられている安心できる環境だと、ネコは長いものでは1日あたり20時間ほどひたすら眠り続ける。ペットとして飼われているネコは餌を探しにいく必要がなく、安全な寝場所も確保されており、特に何をする必要もないため安心して眠り続ける。寝ている時に時折、痙攣したり鳴き声を漏らしたりするが、夢を見ているせいである。主に仔猫の頃の夢（母猫の乳首を吸っている場面）や、狩りをしているときの夢を見るといわれている。

人によって飼われている仔猫はとくに睡眠時間が長く、ネコの飼い方の本などでは「20時間程度眠る」と解説されていることが多い。ほとんど眠っていて、たまに眼を覚ますと母猫の乳を吸い、その後ちょっと遊んでいたかと思うと、またすぐ眠ってしまう、というような状態である。また、仔猫ではほとんどがレム睡眠であるといわれている。そのため、呼びかけたり触れたりすると目を醒ます場合がある。



寝そべり日光浴をする野良の仔猫。猫はビタミンDの合成のために紫外線を要するといわれる。鳥類や毛皮を持つ哺乳類においては、皮膚から毛皮や羽根に皮脂を分泌し毛づくろいすることによって口からビタミンDを摂取しているとの説がある^[92]。

野良猫に限れば、外敵に対する警戒を怠ることができないため、睡眠時間は家ネコよりかなり短めになり、眠っている間も眠りが浅い傾向がある。

日光東照宮の眠り猫は頭を地面につけず上げているが、その姿の時こそ熟睡していることが、研究により明らかに^[93]になっている。

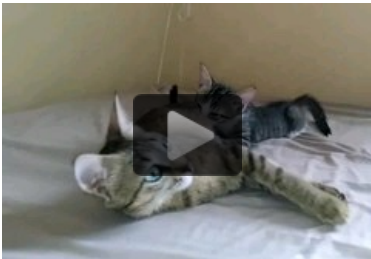
腹部を地に付け、四肢をたたみ、尾を身体側に引き付けたうえて、背を丸めてうづくまる、という猫の姿勢を『香箱（こうばこ）を作る』（香箱座り）と表現する。香箱の蓋の丸く盛り上がった甲の形に由来している^[93]。香箱座りは、前足を完全に折り畳んでいるため、特にリラックスした状態である。一方で家ネコの場合は、外敵に対する警戒の必要性も低い^[93]ため、仰向けないしそれに近い姿勢で、リラックスして寝る場合も見られる。これは同じネコ科の野生動物においても、生態系の頂点に位置し天敵が存在しないライオン^[93]においても見られる。

爪とぎ

放し飼いの地域猫や野良猫の場合は太い木の幹で、飼い猫の場合は壁や柱を使って爪とぎをする。ネコに限らず、狩りをする動物の多くに見られる行動である。古い爪をといで鋭くし、いつでも狩りに使えるようにしておく手入れの他、縄張りを他のネコに対して示す意味がある^[94]。転位行動として行うこともある。室内飼いをする場合、調度品や壁紙などの意図せぬ場所での爪とぎを防止するため、あらかじめ爪を切っておくことが一般的であるが、ネコの爪の根元部分は肉・神経・血管が通っており、先端部分だけを丁寧に切らなければならない。ピンクがかった髄の部分切除すると苦痛を訴えたり、場合によっては出血を伴う恐れがある。また、外科的に爪を除去してしまう手術があるが、本能と深く結びついた道具を失うことになり、ストレスや問題行動の原因となる可能性があるため、この手術を禁止している国は多い^[95]。なお、ネコの爪研ぎの習性は爪がないネコでも同じしぐさをする^[95]ことがあり、何かを始める際の合図ともいわれている。ちなみに人に爪を立てることがあるが、動くとともに食いこむため動かず離すのを待つほうがよい。家庭で飼っているネコの場合、爪磨きの付属したキャットタワー（ネコタワー）があればそれで爪とぎさせるか、代替の爪とぎしてもよい壁を用意しておく^[95]とよい。また、ネコに爪とぎする場所も教えておく必要がある。



睡眠中の子猫



たまに眼を覚ますと母猫の乳を吸う



モモの木に登り爪をとぐネコ。

攻撃手段

ネコが攻撃する際には、前足や後ろ足がよく用いられるが、もともと猫は肉食動物が持つ狩りの武器をすべて持っている。前足を前に差し出し、スナップを利かせて攻撃対象を招き寄せるかのように足裏で攻撃する攻撃方法は「猫パンチ」と呼ばれる^[96]。また、前足で攻撃対象をしっかりと抱き抱えて倒れこみ、後ろ両足で蹴りを繰り返して入れる攻撃方法は「猫キック」と呼ばれる^[97]。いずれの場合も、自由に出入れできる鉤爪を出して攻撃することで、より高い攻撃力が得られ急所にとどめをさす。

噛み付きも、仔猫同士の取っ組み合いなどでよく用いられる攻撃方法である^[28]。攻撃対象をしっかりと抱き抱えた状態で使われる「猫キック」と同時に用いることもある。

体をなめる

いわゆる毛づくろい。全身をくまなくなめることにより空気層を作り保温、唾液により体温低下、清潔になる。舌の届かない部位(顔・首・頭など)については前足に唾液を含ませて拭くように動かす。また、足をなめる際に爪を噛んで引っ張ったりもする^[98]。

鳥類や毛皮を持つ哺乳類においては、皮膚から毛皮や羽根に皮脂を分泌し毛づくろいすることによって口からビタミンDを摂取しているとの説もある^[92]。

尾と感情との関係

尾からうかがえる感情としては以下のようなものが挙げられる。

立っている

比較的機嫌の良いとき^[99]。歩くときは立っていることが多い。個体によっては立てながらくねくねと動かしている場合もある。

横に振っている

速く大きく振っているときは不快なとき^[99]。イヌから類推して「喜んでいる」とするのは誤解である。飼い主に呼ばれると、鳴く代わりに軽く数回振って応えることもある(何らかの形で必ず応えている)^[99]。また、狩りや遊びなどで興奮しているときも横に振ることがある。リラックスしているときも、ゆっくり大きく振ることがある^[99]。

後肢の間に巻き込んでいる

おびえているとき^[99]。通常、耳を後ろに伏せていることを伴う^[100]。

大きくふくらませている

威嚇しているとき、または、驚いたとき。威嚇しているときは全身の毛を逆立てることを伴う^[101]。

他のネコや、人間に巻きつける

相手に親愛の情を持っている。

けんか

長い威嚇行動を経たあとに双方引かない場合には衝突に発展し、威嚇には一方が低音で唸ると他方は高音で返すなどの特徴が窺える。通常は1対1のけんかであるため、人間がけんかの声に似せて横槍を入れると、気味悪がってけんかを中止することもある。けんか・格闘は、跳びかかりやすく有利な高所を制した側が優勢で、そのため、戦略的ポジションを探りながらの威嚇が長時間続く。格闘になるとほんの数秒で決着する。多くの場合、相手に痛手を負わずまでの闘いになるまでに勝敗が決する。

けんかをしている猫を抱き上げると、猛り立った猫は見さかいてもなく主人にでも噛みつき、人がけがをする可能性がある。けんかをやめさせたければ、水をかけるのが最善の方法である。

暖かい場所

暖かい場所を好む習性があり、室内で日の当たる場所がない場合、パソコンやファクシミリなど排熱が大きい機器の近くに移動することが多い。この際排尿することもあり、電子機器の破損に繋がることもある^[102]。

死期の前兆にとる行動

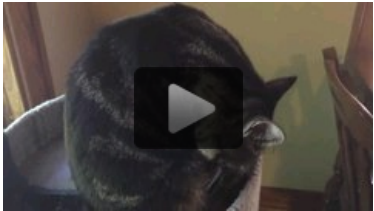
ネコはこれまで“死期が近づくと姿を消す”との風説は、日本では遅くとも江戸時代にはみられ、江戸時代に貝原益軒がのこした生物学・農学書である『大和本草(やまとほんぞう)』の第十四巻には、「凡ソ猫ノ他獣ト異ルコト九アリ」(「猫には他の動物とは異なる点が9つある」)と書かれており「死ヌル時入ニカクレテ人ノ不見處ニテ死ス」(「死ぬ時は人から見えないうちに隠れる」)と記述されている^[103]。また、民俗学者の柳田國男は随筆『どら猫観察記』の中で「第一に猫の終りというものが、いつの場合にも我々の知解の外に在った」と語っており、昭和時代には「死ぬ間際の猫を人は知らない。」という考え方が「我々」という「共通理解」の上にあることを前提としている^[104]。

現代における見解

イギリスの動物行動学者であるデズモンド・モリスは、自著にて^[105]「なぜ、死ぬ時に独りになりたがるのか」という事について言及しており、彼はこの現象を「偶然ではなく、猫の行動の典型的な特徴である」と述べ、その理由を「『闘争・逃走反応』の一種ではないか」との推測を示している。すなわち簡単にまとめれば「ネコは体調不良を抱えた時、その不調の原因を見えない敵からの攻撃と解釈し「闘争・逃走反応」で対応しようと動くものの、肝心



ネコの爪



トラネコ、体をなめる

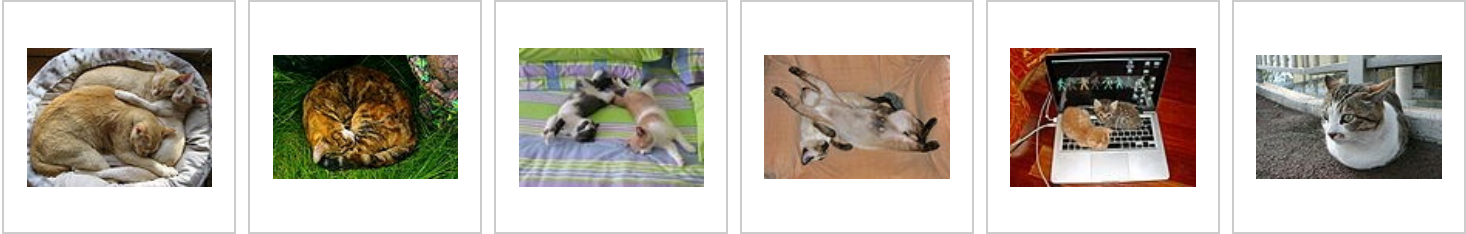


威嚇によって敵を排除できない場合には直接攻撃を加える場合がある。

の戦う相手がいない為に必然的に残された「逃走」の方に頼るしかなく結果として「身を隠す」行動へ繋がり、具合の悪い状態で見えざる敵から隠れていれば体調が回復しないまま死んでしまうこともあって「人目につかない場所で猫が死ぬ」現象が発生する」ということになる。。1992年、アメリカのMcCuneは、「悪い環境に置かれた猫は、積極的に異常行動を示すというよりも、むしろ不活発になる」との調査結果を発表している^[106]。

動物生態学博士の山根明弘は、屋外にて事故や襲撃にあったり体調を崩してしまっても動ける余力のある場合は、ネコにとっての安全な場所である人目につかない遮蔽物の多い狭い空間に本能的に身を隠すので、症状が深刻だと見つけることが出来る前にそのまま死に至るケースが多くなるため、人からは「死期が近づくと姿を消す」に見えてしまうことがあるとしている^[107]。往診専門動物病院の「わんにゃん保健室」院長を務める江本宏平氏によれば「猫は自分の死期を悟ると、飼い主にいつも以上に甘えたり、最後の力を振り絞って元気な姿を見せるなどの行動をとることが多い」という。また同氏はその行動に対し「死期を悟った猫が飼い主に対し、感謝の気持ちを示しているのではないか」との見解を示している^[108]。

習性に関する参考画像



眠る 安全な環境と餌に満たされている家ネコはよく眠る。写真はペット用のベッドで体を寄せ合って眠る3匹のネコたち。

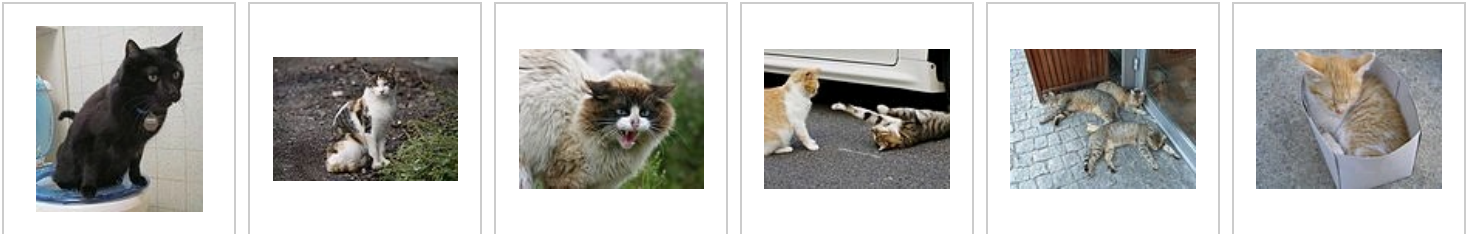
丸くなって身を守るように眠るのがネコの典型的なスタイルの一つ。明るい日中など、この写真のように前足でまぶたに覆いをし、光を遮って眠るネコも多い。

周囲を警戒する必要がないと、体を長く伸ばしてひっくり返ったような姿勢で眠るものもいる。写真は周りを信頼している仔猫たち。

腹を上にして寝る猫。一部の猫愛好家から「へそ天」と呼ばれる寝方。

排熱で暖かいためノートPCの上を好むネコは多い。

「香箱座り」とも表現される着座姿勢。



排泄 通常は砂地状の所にする習性があるが、よく訓練されたネコは人間用のトイレで用を足すこともできる。

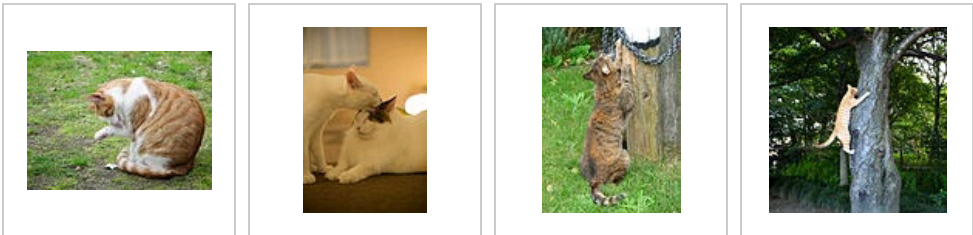
見つめる 一定の距離を取り警戒している。

威嚇 けんかの時は、けんか相手に対し体を横向きにして背中を湾曲させ、体毛を逆立ててふくらませ、体格を大きく見せて威嚇する。

遊ぶ 仲間とじゃれることは狩りの訓練も兼ねる。隠れ場所や寝場所として駐車場を好むものも多い。

群れる 猫は群れを作る習性がないが、餌場など特定の場所に集まることもある。

納まる 箱や袋などに入ったり、家具の後ろや下に隠れたり、狭い場所を好む。



毛づくろい(グルーミング) 耳の裏などの直接なめられない部分は、いったん前足に唾液を含ませ、その湿った前足でなでる。写真は前足をなめている様子。

社会的グルーミング。

研ぐ 樹上生動物としても鋭い鉤爪は欠かせない。

木に登る猫。

人間との関わり

詳細は「[ネコの文化](#)」を参照

人類と猫との歴史の記録は、ネコの家畜化が認められる古代エジプトから始まっており^[109]、関係する文化や風習、創作物、あるいは日常生活や社会における関わり合いについては「ネコの文化」で解説する。

日本では、鳴き声の語呂合わせ(ニャン・ニャン・ニャン)から、ペットフード協会の制定により2月22日が猫の日とされている^{[110][111]}。

世界で飼育されているネコの数

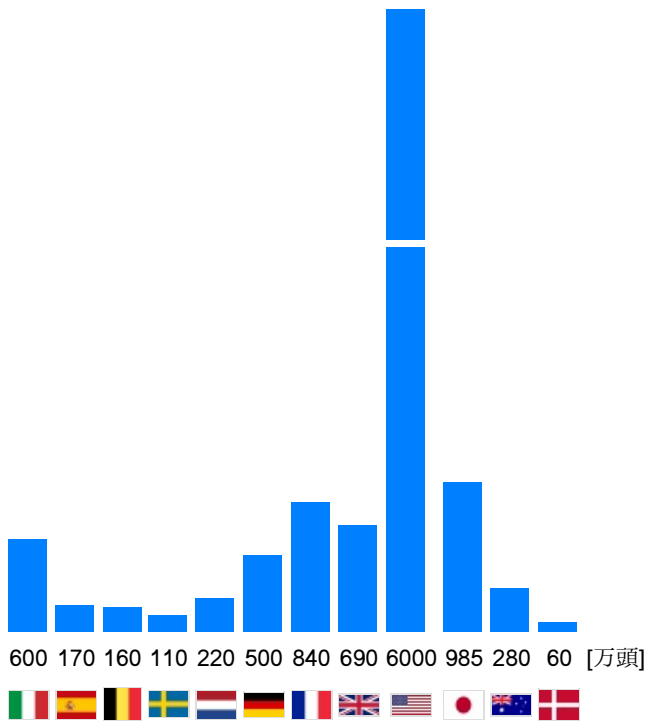
イギリスやアメリカではイヌとネコの飼育頭数はほぼ同じであり、アメリカでは30%以上、ヨーロッパでは24%以上の家庭でネコが飼育されており、この数字はなおも増加傾向にある。

日本でもイヌと並びペットとして飼育されている。国内の予想飼育数は、ペットフード協会の調査によると、2016年時点では984.7万頭^[112]。この値はイヌの987.8万頭より若干少なかった。しかし、2017年時点の同調査で、ネコ952.6万頭、イヌ892.0万頭となり^[113]、同調査が開始されてから初めて逆転した。

この背景には、高齢化社会によって飼育のしやすさが考慮されたこと^[114]や、2010年代に入り起こった、ネコノミクスと呼ばれるネコブームが挙げられる。

イスラム圏では、ムハンマドが猫を愛したというスナナが残っていることから、非常に尊ばれる生き物となっており、ペットとしても人気がある（「イスラームとネコ」も参照）^[115]。

ペットとして世界で飼育されているネコの数^{[116][117]}



脚注

注釈

- [^] ギネス認定記録はクリーム・パフの38歳3日である。非公式ながら39歳のネコも確認されている^[8]。
- [^] ネコの癒し効果を売りにしている店がこの誤解によってしばしば非難されるが、店がネコの餌として販売しているのが湿り気のある燻製イカなどである場合、問題があるとしても与える量だけである。

出典

1. ^ Driscoll CA, Macdonald DW, O'Brien SJ, et al. (June 2009). "In the Light of Evolution III: Two Centuries of Darwin Sackler Colloquium: From wild animals to domestic pets, an evolutionary view of domestication" (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2702791/>). *Proc. Natl. Acad. Sci. U.S.A.* **106** (S1): 9971–9978. doi:10.1073/pnas.0901586106 (<https://doi.org/10.1073/pnas.0901586106>). ISSN 0027-8424 (<https://www.worldcat.org/search?fq=x0:jrnl&q=n2:0027-8424>). PMC: 2702791 (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2702791/>). PMID 19528637 (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/19528637>).
2. ^ Bulletin of Zoological Nomenclature. "International Commission on Zoological Nomenclature, Opinion 2027 (Case 3010). Usage of 17 specific names based on wild species which are predated or contemporary with those based on domestic animals (Lepidoptera, Osteichthyes, Mammalia): conserved". *Bulletin of Zoological Nomenclature*, Volume. 60, 2003, pp. 81-84.
3. ^ Science Magazine Japan (2007年6月29日). "イエネコの祖先は近東出身 // Tabby's Ancestors Traced to the Near East(今週のハイライト)" (<https://web.archive.org/web/20070701180657/http://www.sciencemag.jp/highlights/20070629.html>). 2007年7月1日時点のオリジナル (<http://www.sciencemag.jp/highlights/20070629.html>)よりアーカイブ。2008年4月19日閲覧。
4. ^ 奈良文化財研究所 読売新聞(2008年06月22日)
5. ^ 『世界大百科事典』(平凡社)「ネコ」の項目。
6. ^ 猫はいつから日本にいるのか (<https://webbronza.asahi.com/science/articles/2019031600001.html>) - 朝日新聞社 WEBRONZA, 2019年3月25日
7. ^ Kahn, Cynthia M.; Line, Scott (2007). Hollander, Joseph Lee. ed. *The Merck/Merial Manual for Pet Health*. Merck & Co.. ISBN 978-0-911910-99-5.
8. ^ "ギネス更新か!? イギリスで172歳のネコちゃん発見" (<https://web.archive.org/web/20110116013501/http://rocketnews24.com/?p=65132>). *ロケットニュース24*. (2011年1月13日). オリジナル (<http://rocketnews24.com/?p=65132>)の2011年1月16日時点によるアーカイブ。2014年6月13日閲覧。
9. ^ 茨城県猫の適正飼養ガイドライン (https://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/seiei/kankyo/seiei/envandani/newtop/documents/nekonotekiseisiyougaidorainn_1.pdf)
10. ^ 下越動物保護管理センター:猫の室内飼育のすすめ (http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/175/561/28.8.16nekositunaisiiku.pdf)
11. ^ 愛知県:所有者のいない猫の適正管理マニュアル (<http://www.pref.aichi.jp/douai/konnnatokiwa/neko/cat-manual.pdf>)
12. ^ 神奈川県飼い主のいない猫対策ガイドライン (<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/e8z/cnt/f6808/documents/914001.pdf>)
13. ^ 「和歌山県動物の愛護及び管理に関する条例の一部改正」 (https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/031600/80_doubutsu/nekopabukome_d/fil/touronkaresult.pdf)
14. ^ *Mottomo kuwashii neko no byōki hyakka : neko no byōki kega no chishiki to chiryō* (<https://www.worldcat.org/oclc/166678294>). Yazawa Saiensu Ofisu., 矢沢サイエンス・オフィス.. Gakken. (2002). ISBN 4054014747. OCLC 166678294 (<https://www.worldcat.org/oclc/166678294>).
15. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本、P. 138
16. ^ 日本と世界の猫のカタログ '96 - ネコのボディタイプ、P. 112
17. ^ *a b* エドニー先生の猫と楽しく暮らす本 - 動作と平衡感覚、P. 16
18. ^ 愛犬の友編集部 1990, p. 90.
19. ^ *a b* Quark編集部 1998, p. 不明.
20. ^ Quark編集部 1998, p. 119.
21. ^ "猫の目の不思議【動物まめ知識】" (<http://www.petjpr.com/column/news-bin/Detail.cgi?rgst=00000409&CatgM=4>). ペットクリニック・ドットコム. 株式会社JPR. 2016年7月22日閲覧。
22. ^ "暗闇でカメラのフラッシュを向けてしまいました" (<http://www.pethospital.jp/question/show/13318>). ペット相談. どうぶつ病院.JP (2012年6月11日). 2016年7月22日閲覧。
23. ^ "【あんしん!ペットライフ】(113)犬や猫の目が光る謎" (<http://www.sankei.com/life/news/150821/lif1508210007-n1.html>). 産経新聞 (2015年8月21日). 2016年7月23日閲覧。
24. ^ "プロが教えるかわいい猫の撮り方レシピ/雨樹 一期" (<http://web.archive.org/web/20161008153956/http://inumo-nekomo.jp/feature/%E3%80%90%E3%83%97%E3%83%AD%E3%81%8C%E6%95%99%E3%81%88%E3%82%8B%E3%80%91%E3%81%8B%E3%82%8F>)

- %E3%81%84%E3%81%84%E7%8C%AB%E3%81%AE%E6%92%AE%E3%82%8A%E6%96%B9%E3%83%AC%E3%82%B7%E3%83%94/%E3%81%8B%E3%82%8F%E3%81%84%E3%81%84%E7%8C%AB%E3%81%AE%E6%92%AE%E3%82%8A%E6%96%B9%E3%83%AC%E3%82%B7%E3%83%9402)”. イヌモエコモ. イヌモネコモ 運営委員会. 2016年10月8日時点のオリジナル (<http://inumo-nekomomo.jp/feature/%E3%80%90%E3%83%97%E3%83%AD%E3%81%8C%E6%95%99%E3%81%88%E3%82%8B%E3%80%91%E3%81%8B%E3%82%8F%E3%81%84%E3%81%84%E7%8C%AB%E3%81%AE%E6%92%AE%E3%82%8A%E6%96%B9%E3%83%AC%E3%82%B7%E3%83%94/%E3%81%8B%E3%82%8F%E3%81%84%E3%81%84%E7%8C%AB%E3%81%AE%E6%92%AE%E3%82%8A%E6%96%B9%E3%83%AC%E3%82%B7%E3%83%9402>)よりアーカイブ。2016年7月23日閲覧。
25. ^ “猫の写真をもっとかわいく!プロが教える写真の撮り方 (<https://www.iris-pet.com/nyan/take-photo/02.html>)”. アイリスペットどっとコム. アイリスオーヤマ. 2016年7月23日閲覧。
26. ^ “猫の目の仕組み・不思議:暗闇のなかでキラリと光る印象的な大きな瞳 (http://www.santen.co.jp/ja/healthcare/eye/eyecare/wonders/cat_eye.jsp)”. 参天製薬. 2016年7月23日閲覧。
27. ^ 愛犬の友編集部 1990, p. 59.
28. ^ ^{***a*** ***b***} ネコの気持ちがよくわかる本, P. 44
29. ^ 小林亮. “音の波と三角関数 (<http://www.math.sci.hiroshima-u.ac.jp/KOUKAI/text-h18/Sound.pdf>) (PDF)”. 広島大学大学院理学研究科. p. 3. 2019年1月4日閲覧。
30. ^ トラックポイント・キャップ・コレクション:Lenovo (<https://www.lenovo.com/jp/ja/accessories-and-monitors/keyboards-and-mice/trackpoint-caps/c/TrackPoint-caps>)
31. ^ ネコの舌応用 ゴミ圧縮ブレード:SHARP (<https://jp.sharp/nature/tec/soujiki>)
32. ^ “「ネコの舌は「唾液のブラシ」毛づくろいの秘密解明 (<http://www.afpbb.com/articles/-/3198348>)」『』. 2018年11月22日閲覧。
33. ^ “Cats use hollow papillae to wick saliva into fur (<https://www.pnas.org/content/115/49/12377>)”. 米国科学アカデミー紀要電子版. 米国科学アカデミー (2018年12月4日). 2019年6月19日閲覧。
34. ^ Mestel, Rosie (July 25, 2005), “Cats Lack a Sweet Tooth, Study Says: Scientists find that felines don't have a taste for goodies because of a dysfunctional gene.” (<http://articles.latimes.com/2005/jul/25/science/sci-catsweet25>) *Los Angeles Times*, retrieved November 2, 2010.
35. ^ 松井匠作 (2003年11月11日). “栄養に関する猫の特性について (<https://www1.hills.co.jp/vetssite/practice/hfs/hfs046.shtml>)”. 栄養学情報,ヒルズ・クリニック通信,vol.46. 日本ヒルズ・コルゲート. 2014年6月22日閲覧。
36. ^ 『ねこのきもち』ベネッセコーポレーション、2008年7月、12頁。
37. ^ 日本と世界の猫のカタログ '96 - ヒゲの秘密、P. 136
38. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本 - 猫の感覚器、P. 14
39. ^ ^{***a*** ***b***} “<尾曲がり猫>本当に長崎に多いの? 市民の「学会」発足” (<https://web.archive.org/web/20090116130740/http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20090109-00000071-mai-soci>). *毎日新聞* (Yahoo!ニュース). (2009年1月9日). オリジナル (<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20090109-00000071-mai-soci>)の2009年1月16日時点によるアーカイブ。2014年6月23日閲覧。
40. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本、P. 19
41. ^ “ネコの「ゴロゴロ声」に秘められた能力を探れ! (<https://web.archive.org/web/20110518182650/http://www.ntv.co.jp/FERC/research/20021201/r084.html>)”. Far East Research Co. (2002年12月1日). 2011年5月18日時点のオリジナル (<http://www.ntv.co.jp/FERC/research/20021201/r084.html>)よりアーカイブ。2014年6月23日閲覧。
42. ^ “猫が「カカカ」って鳴くのは何?猫の変わった鳴き方とその意味について (<https://にゃん.com/knowledge-of-cat/cat-chattering/>)”. にゃんこむ. 2018年6月22日閲覧。
43. ^ “The quality of being sociable: The influence of human attentional state, population, and human familiarity on domestic cat sociability (<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0376635718300998>)”. *www.sciencedirect.com*. Elsevier. 2019年4月7日閲覧。
44. ^ “ネコは自分の名前を聞き分ける、上智大ほか研究 (<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/19/040500211/>)”. *natgeo.nikkeibp.co.jp*. ナショナル・ジオグラフィック. 2019年4月11日閲覧。
45. ^ 日本と世界の猫のカタログ '96 - ペルシャ、P. 78
46. ^ ^{***a*** ***b***} “猫の発情期と対策について【獣医師が解説】/ (<https://nyanpedia.com/post-4818/>)服部幸”. にゃんペディア. アイペット損害保険株式会社 (2015年11月8日). 2019年2月28日閲覧。
47. ^ 山根明弘「第4章 恋と青春」『ねこの秘密』文藝春秋社<文春新書>、2014年9月、pp161-165。ISBN 978-4-16-660990-1。
48. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本 - 妊娠と分娩前の管理、P. 147
49. ^ “♀ 子猫のオスとメスの見分け方 ♂ (<https://nekopedia.jp/kitten-male-female/>)”. 猫専門病院の猫ブログ *nekopedia* ネコペディア. 山本宗

- 伸. 2019年1月4日閲覧。
50. ^ “生後0日～45日位までの 赤ちゃん猫(乳飲み子仔猫)の育て方 / にゃんこのうち (http://tukichan.jp/b_contents/koneko/01.html#Anchor_06)”. 2019年1月4日閲覧。
51. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本, P. 58
52. ^ “タウリンの生理作用に関する研究～タウリントランスポーターノックアウトマウス (<http://www2.huhs.ac.jp/~h090018/taurineresearch.html>)”. 臨床ゲノム薬理学研究室. 兵庫医療大学薬学部 (2011年). 2014年6月23日閲覧。
53. ^ 『NRC National Academy of Sciences (1986) Washington,DC.』
54. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本, P. 59
55. ^ *a b c d e f g* “与えてはいけない食べ物 (<http://www.nisshin-pet.co.jp/study/dictionary/cat/category01/basic/ikenai.html>)”. *愛猫のハッピーLife百科*. 日清ペットフード株式会社. 2016年8月5日閲覧。
56. ^ *a b c* “猫に与えてはいけない食べ物 (<https://web.archive.org/web/20171204061256/http://www.kao.co.jp/pet/cat/jiten/category04/001.html>)”. *愛猫と暮らす生活事典*. 花王. 2016年8月5日閲覧。※ 現在はインターネットアーカイブ内に残存
57. ^ “絶対に猫に与えてはいけない食べ物【獣医師監修】 (<https://nyanpedia.com/post-3990/>)”. にゃんペディア. アイペット損害保険株式会社 (2015年9月26日). 2019年6月19日閲覧。
58. ^ 塩見一雄・長島祐二共著『海洋動物の毒』成山堂書店。
59. ^ “自然毒のリスクプロファイル: 巻貝: ピロフォルバイドa (光過敏症) (http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/poison/animal_det_16.html)”. 厚生労働省. 2014年6月23日閲覧。
50. ^ “乳の成分 (https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/petfood_guide/pdf/full.pdf#page=5)  (PDF)”. *飼い主のためのペットフード・ガイドライン*. 環境省. p. 5 (2009年10月). 2018年5月23日閲覧。“『飼い主のためのペットフード・ガイドライン』HTML版目次 (https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/petfood_guide.html)”
51. ^ クックパッド編集部 (2014年8月13日). “【もう一度見直したい】犬や猫に与えてはいけない食材とは?” (<https://news.cookpad.com/articles/2217>). クックパッドニュース 2018年5月23日閲覧. “全2頁構成(→2頁目 (<https://news.cookpad.com/articles/2217?page=2>))”
52. ^ 中岡早苗 (2016年10月20日). “子猫のミルクの与え方はどうすれば? 量、頻度、飲まない時の対処法は?” (<http://psnews.jp/cat/p/19934/>). ペットスマイルニュースforネコちゃん ((株)Pet smile) 2018年5月23日閲覧。
53. ^ *a b* “「ネコにチョコレート食べさせた」に愛猫家仰天 TBSに「ネコが死ぬぞ」「放送を止めてくれ” (<https://www.j-cast.com/2016/01/06254903.html>). J-CASTニュース. (2016年1月4日) 2018年5月24日閲覧。
54. ^ higarina (著者); ねこのきもち相談室獣医師 (監修) (2018年2月1日). “【獣医師が解説】1粒でも危険!? 猫×チョコレートの致死量とは? (<https://cat.benesse.ne.jp/withcat/content/?id=18608>)”. *ねこのきもち WEB MAGAZINE*. ベネッセコーポレーション. 2018年5月24日閲覧。
55. ^ 山本宗伸 (2016年3月25日). “なぜ猫にたっぷりとかつお節を与えてはいけないのか (<https://news.mynavi.jp/article/20160325-a047/>)”. マイナビニュース. マイナビ. 2018年5月26日閲覧。
56. ^ *a b* “ペット豆知識29-犬猫の毒物とその対処法 (<http://tabaru.9syu.net/case/perm/61.htm>)”. トピックス. 動物病院TAC (たばる動物病院). 2019年6月19日閲覧。
57. ^ クリステン・レイベル『愛しのペットアロマセラピー』田邊和子・斎藤寛充朗: 訳、さんが出版、2004年、ISBN 4-880-96051-9
58. ^ 日本アニマルアロマセラピー協会『猫から飼い主への手紙』ブログハウス、2007年、ISBN 4-880-96145-0. 電子書籍版: 青林堂 (<http://itunes.apple.com/jp/app/id399403770?mt=8>)
59. ^ “日本アニマルアロマセラピー協会 (<https://web.archive.org/web/20120519081219/http://www.animalaromatherapy.jp/>)”. 2012年5月19日時点のオリジナル (<http://www.animalaromatherapy.jp/>)よりアーカイブ。2012年7月2日閲覧。
70. ^ “日本アニマルアロマセラピー協会アニマルアロマセラピー10箇条 (<https://web.archive.org/web/20130528125951/http://www.animalaromatherapy.jp/10articles.html>)”. 2013年5月28日時点のオリジナル (<http://www.animalaromatherapy.jp/10articles.html>)よりアーカイブ。2012年7月2日閲覧。
71. ^ “猫のアセトアミノフェン中毒 (<https://www.irisplaza.co.jp/media/A13925281995/>)”. *アイリスペットどっとコム*. *アイリスオーヤマ*. 2019年5月17日閲覧。
72. ^ “αリボ酸は猫には大変危険です (<http://www.saitama-vma.org/topics/%CE%B1%E3%83%AA%E3%83%9D%E9%85%B8%E3%81%AF%E7%8C%AB%E3%81%AB%E3%81%AF%E5%A4%A7%E5%A4%89%E5%8D%B1%E9%99%BA%E3%81%A7%E3%81%99/>)”. 埼玉県獣医師会 (2009年8月22日). 2019年5月17日閲覧。
73. ^ “オーストラリアの猫、飼い主の育毛剤なめて生死さよう (<https://jp.reuters.com/article/idJPJAPAN-33257620080814>)”. *ロイター* (2008年8月14日). 2019年5月17日閲覧。
74. ^ “ペットの相次ぐ不審死、原因は塗り薬―米当局が注意呼びかけ (<http://kenko100.jp/articles/150422003440/>)”. *あなたの健康百科*. 2015年4月24日閲覧。

75. ^ "FDA Warns of Illnesses and Deaths in Pets Exposed to Prescription Topical Pain Medications Containing Flurbiprofen (<http://www.fda.gov/AnimalVeterinary/NewsEvents/CVMUpdates/ucm443333.htm>)". U.S. Food and Drug Administration. 2015年4月24日閲覧。

76. ^ "ネコ (<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/10220.html>)". 侵入生物データベース. 国立環境研究所. 2018年6月24日閲覧。

77. ^ "鹿児島県侵略的外来種カルテ「ノネコ」 (https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/documents/58074_20170401113747-1.pdf) (PDF)". 鹿児島県 (2017年3月). 2018年6月24日閲覧。

78. ^ Discovery編集部 (2017年12月1日). "飼い猫を外に放す双方向のリスクとは?" (<https://www.discoverychannel.jp/0000005267/>). *Discovery Japan* 2018年6月24日閲覧。

79. ^ 外尾誠; 小坪遊 (2017年3月24日). "希少種を襲う野ネコ 捨てられて野生化、アマミクロウサギ狙う" (<https://sippo.asahi.com/article/10562763>). *朝日新聞(sippo)* 2018年6月24日閲覧。

80. ^ *a b c* "「奄美の明日を考える奄美国際ノネコ・シンポジウム」記録集 (http://kankyo.rdc.kagoshima-u.ac.jp/wp2016/wp-content/uploads/2017/06/amanonekosinpo-kirokushu.pdf#search='%E3%83%A1%E3%82%BD%E3%83%97%E3%83%AC%E3%83%87%E3%82%BF%E3%83%BC%E8%A7%A3%E6%94%BE%E4%BB%AE%E8%AA%AC'))". 鹿児島大学 鹿児島環境学研究会. 2019年2月10日閲覧。

81. ^ "小笠原で異変...外来ネコ捕獲、明暗分けた固有種 (<https://web.archive.org/web/20131128060303/http://www.yomiuri.co.jp/eco/news/20131121-OYT1T00702.htm>)". アーカイブ. 読売新聞 (2013年11月15日). 2019年2月13日閲覧。

82. ^ 猪野元健(朝日小学生新聞・朝日中高生新聞記者) (2017年2月23日). "島で野生化したネコが希少動物を襲う 一歩先を進む小笠原の対策とは" (https://www.huffingtonpost.jp/takeshi-inomoto/ogasawara-cat_b_14651020.html). ハフポスト. 朝日小学生新聞 2018年6月24日閲覧。

83. ^ "イリオモテヤマネコ (<http://www.env.go.jp/nature/kisho/hogozoushoku/iriomoteyamaneko.html>)". 政策分野・行政活動「自然環境・生物多様性」. 環境省. 2018年6月24日閲覧。

84. ^ 竹前朝子「「希少野生動物の保護と自治行政」によせて (<http://www.law.kanagawa-u.ac.jp/institute/01/pdf/13-13.pdf>) (PDF)」『神奈川大学法学研究所ニュースレター』第13号、神奈川大学法学研究所、2009年3月、13頁、2018年6月24日閲覧。“ニュースレター(目次) (<http://www.law.kanagawa-u.ac.jp/institute/01/publication.html>)《神奈川大学法学研究所Webサイト内『法学研究所について～刊行物』より》”

85. ^ Worthy, T.H. & Holdaway, R.N. (1994) "Scraps from an owl's table---predator activity as a significant taphonomic process newly recognised from New Zealand Quaternary deposits." *Alcheringa* 18: 229–245.

86. ^ Millener, P.R. (1984) New Zealand theses in Earth Sciences: The Quaternary avifauna of the North Island. New Zealand. PhD, 1981. University of Auckland-2 vols.; kviii + 897 up. (abstract). *NZ J. Geol. Geophys.* 27: 99–100.

87. ^ Millener, P.R. (1988) "Contributions to New Zealand's Late Quaternary avifauna I: Pachyplichas, a new genus of wren (Aves: Acanthisittidae), with two new species." *J. Roy. Soc. NZ* 18(4): 1x1–An6

88. ^ Tyrberg, T. & Milberg, P. (1991) *Xenicus lyalli* exterminated by Polynesian rats and lighthousekeepers cats. *Var Fagelvarld*, 505: 15-18.

89. ^ スー・ドナルドソン、ウィル・キムリツカ『人と動物の政治共同体』尚学社、2016年、344頁。

90. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本 - 人に伝染する病気、P. 124

91. ^ ネットでも見られる参考情報。

- "動物病院VERDE 獣医師の解説 (<https://web.archive.org/web/20091222080726/http://www.verde-ah.com/q/q14.html>)". 2009年12月22日時点のオリジナル (<http://www.verde-ah.com/q/q14.html>)よりアーカイブ。2014年6月23日閲覧。(猫の睡眠時間16時間といわれている、との解説)
- 知泉「猫」(<http://www.tisen.jp/tisenwiki/?%C7%AD>)
- 仁科秀雄医師の学校保健会資料 (http://www.kurashiki-oky.ed.jp/school/tamanishi-j/08kenkyu/frontier/h15_torikumi_2/h15_seika_7kara12.htm)

92. ^ *a b* Stout, Sam D.; Agarwal, Sabrina C.; Stout, Samuel D. (2003). *Bone loss and osteoporosis: an anthropological perspective*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. ISBN 0-306-47767-X.

93. ^ 愛犬の友編集部 1990, p. 60.

94. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本、P. 83

95. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本 - 爪の手入れ、P. 66

96. ^ ペット用語事典犬・猫編、P. 422

97. ^ ペット用語事典犬・猫編、P. 402

98. ^ "猫の舌、毛づくろいに唾液活かす仕組みを解明 (<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/18/112100504/>)". ナショナル ジオグラフィック. 2018年6月24日閲覧。

2019年4月10日閲覧。

09. ^ a b c d e ネコの気持ちがよくわかる本 - しっぽで気持ちがい一日瞭然、P. 191
10. ^ ネコの気持ちがよくわかる本 - 耳の角度と猫の気持ち、P. 190
11. ^ ネコの気持ちがよくわかる本 - 気持ちを伝える猫のボディランゲージ、P. 193
12. ^ 機器開発に盲点、家庭用ファクス焼損の原因は猫 (https://www.nikkei.com/article/DGXNASFK03016_T00C13A4000000/) - 日本経済新聞
13. ^ 大和本草巻之十六 (<http://www.nakamura-u.ac.jp/library/kaibara/archive01/pdf/b16.pdf>)
14. ^ 柳田國男. どら猫観察記 (https://www.aozora.gr.jp/cards/001566/files/54905_49756.html). 青空文庫 2018年12月5日閲覧。
15. ^ 『キャット・ウォッチング〈Part2〉』1988年3月、平凡社。改訂版『キャットウォッチング2 猫に超能力はあるか?』平凡社、2009年10月
16. ^ 猫は死ぬ前に姿を消す〜猫に関する迷信や都市伝説を検証する (<https://www.konekono-heya.com/myth/retreat.html>) 子猫のへや
17. ^ 山根明弘『ねこの秘密』文藝春秋社〈文春新書〉、2014年9月、pp203-206。ISBN 978-4-16-660990-1。
18. ^ “猫は死期が近づくと姿を消すのは本当か エンジェルタイムの重要性 (https://www.news-postseven.com/archives/20181202_813649.html)”。NEWSポストセブン (2018年12月2日)。2018年12月5日閲覧。
09. ^ 平岩米吉「第一章 猫の歴史」『猫の歴史と奇話』築地書館、1992年10月。ISBN 4-8067-2339-8。
10. ^ 「ねとらぼ:2月22日「猫の日」に、NHK「デジタル猫暦」をどうぞ (<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1002/22/news074.html>)」ITmedia News、2010年2月22日。
11. ^ “あす平成22年2月22日 2並び記念入場券を発売 北総鉄道” (https://web.archive.org/web/20110910095529/http://www.chibanippo.co.jp/news/chiba/local_kiji.php?i=nesp1266718469). *千葉日報*. (2010年2月21日). オリジナル (http://www.chibanippo.co.jp/news/chiba/local_kiji.php?i=nesp1266718469)の2011年9月10日時点によるアーカイブ。2014年6月22日閲覧。
12. ^ 平成28年 全国犬猫飼育実態調査 主要指標サマリー (<http://www.petfood.or.jp/data/chart2016/2.pdf>)  (PDF)
13. ^ 平成29年 全国犬猫飼育実態調査 主要指標サマリー (<http://www.petfood.or.jp/data/chart2017/3.pdf>)  (PDF)
14. ^ 猫の飼育数、犬を逆転へ 年々差縮まる (http://mw.nikkei.com/sp/#!/article/DGXLASDG30H1Y_Q6A130C1000000/) 2016年1月30日、日本経済新聞
15. ^ 堀内勝「猫」『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年2月)、732頁
16. ^ エドニー先生の猫と楽しく暮らす本、P. 21
17. ^ 平成28年 全国犬猫飼育実態調査 主要指標サマリー (<http://www.petfood.or.jp/data/chart2016/2.pdf>)

参考文献

- アンドリュー・エドニー『エドニー先生の猫と楽しく暮らす本』ペットライフ社、1995年。ISBN 4938396297。
- 写真:山崎哲 監修:小島正記『日本と世界の猫のカタログ '95』成美堂出版、1994年。ISBN 4415040233。
- 写真:山崎哲 監修:小島正記『日本と世界の猫のカタログ '96』成美堂出版、1995年。ISBN 4415040829。
- 服部幸『ネコの気持ちちがよ〜くわかる本』秀和システム、2008年。ISBN 9784798019741。
- 『ペット用語事典犬・猫編』ワンダーブック、2005年。ISBN 9784862180001。
- 『日本猫の飼い方』愛犬の友編集部、誠文堂新光社〈キャット・ガイド・シリーズ〉、1990年6月。ISBN 4416590059。
- 『科学・178の大疑問』Quark編集部、講談社〈ブルーバックス〉、1998年7月。ISBN 4062572214。

関連項目

- 「ネコ」で始まるページの一覧
- 「ねこ」で始まるページの一覧
- 「猫」で始まるページの一覧
- 「Cat」で始まるページの一覧
- 「キャット」で始まるページの一覧
- 「キャッツ」で始まるページの一覧
- 英語版ウィキペディア内にあるネコの一覧

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=ネコ&oldid=75472993>」から取得

